

ていく基本的な姿勢なのではないかと気付いたのです。まず会の基本的な考え方を――

- 一、鶴見区の（住んでいる所の）福祉の実態を知る
- 二、学ぶ姿勢をつねに持つ
- 三、思想、宗教、政治にかかわりなく、人間として考える
- 四、ささやかなりとも力を寄せ合っていく
- 五、暖かい心のひろがり求めていたしました。

また、初年度の事業目標として――

- 一、福祉の理念の普及
- 二、一人ぐらしの寝たきり老人（愛の一声運動）
- 三、心身障害児自主訓練会へ保育の手伝い
- 四、会員の学習会、話し合いの会
- 五、要請に基づく行事の手伝い
- 六、その他目的達成のための事業の六項目をきめました。

そして会の発足を五十一年四月二日と
きめ、『福祉を考える映画の集い』を鶴見会館ホールでいたしました。当日は九
四六名の入場がありました。当日は九
ました。いま、私たちは子供の遊びで
『この指とまれ』というのがありますが
あのように、障害児のために、老人のた
めに、福祉の理念の普及に、それぞれの

特技と自分の目的に合せた、分会で自分
のできることを無理をしないで細く長く
続けたいと思っています。別紙の記録の
中で『詩と歌曲のサロン』『ピアノコン
サート』等は、私たちが福祉を、一人一
人がどんなにささやかでも、幸せを感じ
て生きると言う意味に捉え、つらいとき、
悲しいときに、美しい音楽が、美しい詩
がしばし心に安らぎをあたえてくれます
ことを大勢の人々に知ってもらい、福祉
の心をひろめるために開催いたしました。

また、老人給食も始めるべく調査、研
究に励んでいます。視覚障害のあるお子
さんに、少しでも夢をとの絵本（手で
さわってみる本）を神奈川具視覚障害児
者を持つ親の会、よこはま文庫の会、キ
ビタスの会がいっしょになって作ろうと
しています。おかげさまで地域の方々
が材料や専門的な技術を提供してくださ
っています。

振り返ってみますと、横浜詩人会、レ
オちゃんクラブ（鶴見区在住の二十才の
青年男女の奉仕の会）、ロータリークラ
ブ、ライオンズクラブその他大勢の方々
の善意の協力が私たちのボランティア活
動をささえ、今日まで一つ一つの奉仕活
動がみのってきたのだと思います。

行政に望むこと

私たちがボランティア活動を始めた頃
は、世の中も行政も市民の自主的な活動
を思想的に危険視されていたのが、いま
では福祉を大きく捉え、良い方向に進み
つつある。けれど末端の市民と向き合う
窓口の区等では、まだ行政主導型で生れ

自主幼児教育

編集部

自分たちの子供を自分たちで集団で育
てようという活動は、幼稚園年齢児を対
象にしたものはそれほど多くはない。こ
のいわば『自主幼稚園』とでもいうべき
数少ない活動例として、次に紹介する「ひ
まわり幼児教室」のほかに、戸塚区ドリ
ームハイツの「すぎの子会」が知られて
いる。

マスプロ化した幼稚園教育に疑問をも
った親たちが自分たちで幼児教育をし
てみようとして五十年四月に始めたこの会は、
発足当初から注目を集めた（本市発行の
『市民グラフィック』14号でもとりあ
げている）。団地の近くの土地を借り、
古い市バスとプレハブを教室に、小さな
運動場のほか、近くの林や小道なども保
育の場として活用されている。幼児教育
には素人の母親のなかから保母を選び、

たものが良いと思ったり、また逆に市民
追従型の考えの方が多い。市民の役割と
行政の役割をはっきりふまえた上で、柔
軟性のある判断ができる人を育ててほし
い。なぜなら行政も結果は人が作り上げ
るものだから。そして市民と手をたずさ
えて、横浜市をいや日本を作りあげてい
きたいと思えます。

どの母親も交代で助手をつとめる。母親
たちはわが子だけをみるのではなく、集団
の中でどの子にも目を注いでいる。
『自分たちで幼児教育を』と集まった
人たちも、その考え方はいろいろだ。朝
のあいさつのさせ方から、どんな子に育
てたいかまで、意見がくいちがうたびに
何度も話し合いをくり返している。「そ
れら乗り越えることによって信頼関係
ができ、会が充実してきました」と会員
の一人は話している。またケンカは相手
を認める第一歩だ、ドロンゴ遊びは幼児
期に欠かせないものだから、親が子供た
ちの活動から教えられ、成長していった
面も著しいという。

満二年たったこの三月には、子供の成
長と共にこの会を『卒業』する親も何人
かできてきている。「この会の活動で多く

のことを考え学びました。ここで得たものをもって、地域の他の活動にどう参加

していくかが会員の課題です」と会長の松本和子さんは話している。

ひまわり幼児教室

田中佳世子

「自分たちで幼児教育をやってみよう」、そんな声でたのは一昨年の春頃

でした。

幼稚園入園児をもった親たちにとって、十万円をこえる、入園金や制服代は頭のいたい問題です。なぜ幼稚園に入れるの……といわれても、就学前は幼稚園か保育園へ入れるのが、当然だと思

っていた私たちでした。でも、なぜといわれると、「みんながいくから」、「集団生活に慣れさせるために」、「もだちがいなくてかわいそうだから」など、幼稚園に入れなければならない確固たる理由がないのです。そんなに高い保育料を払って幼稚園に入れる意味があるのだろうか。何人かの母親が同じ疑問をもって話し合ってみました。

集団になれさせるんだったら、友だちをつくるんだったら、私たちが子どもを集めてやってみよう、ということになったのです。そして、同じような考えの人達に呼びかけってみました。何度も何度も話し合いました。そして、十五名の子どもたちを集めて、十月から週一回の保育が始まったのです。保育は保母一人に子

どものお母さんが二人ずつ交替であたり

上でした。そこで四歳児とひきつづき就学時まで幼児教室に残る三歳児を一クラス、幼稚園にいく三歳児を一クラスと二クラスに分けて保育することにし、前のクラスを週五日、後のクラスを週三日の保育にしました。

団地の集会所での保育は、保育環境としてはよいとはいえません。まず机やイスが子ども用じゃないので、ぶらんぶらんする足に気をとられて落ち着かないとか、手洗いが高すぎる、下駄箱に名まえをはれない、遊び場がない、部屋がせまいなどたくさんあります。

しかし一年半子どもたちと接して感じることは、子どもたちは幼稚園にいかなくても、自主的な保育のなかでも集団性を養うことができるし、友だちをつくることのできる、そして社会とのかかわりあいもわかってくる、基本的習慣の自立も子どもたち同志のかかわりあいのなかで、できてくるということです。

並ぶことも、一人でおしっこすることでもできなかった子どもたちが、ちゃんとできるようになる、散歩に行くときもすぐバラバラになってしまった子どもたちが、今ではきちんと手をつないで交通ルールを守って歩くことができる。決して幼稚園よりすぐれているとはいえないけれど、みんなの親達の協力のなかで子どもはすくすくとのびているのです。

しかし、幼児教室を幼稚園の、幼稚園を小学校に入れるための準備教育だと考えている人たちも大ぜいいます。しかし、「三つ児の魂百まで」といわれるように、この幼児期は人間の性格形成に大きな役割をはたす時期であるといわれています。親も保育者も形だけの幼児教育ではなく、子どもたちのために本当の教育とは何なのか考えるべきだと思えます。

その点で、私たちは自主的にやっているだけに、母親との学習の場をたくさんつくって、おたがいに納得した方向で保育していきたいと考えています。今まで土地探しなどに追われて、保育内容を充実させる方向でなかったことを反省しています。

今後の問題点としては、保育内容を充実させるとともに、この幼児教室の活動が自分達だけの自己満足で終わらないように、幼児教育のあり方¹の問題として、一人でも多くの人に訴えたいと考えています。横浜市には公立の幼稚園がなく、私立幼稚園のたかい保育料に頭を痛めている親がたくさんいます。助成金をたくさん出してもらうような運動とか、公立幼稚園設置の運動なども進め、親の経済的な負担を少なくするようにしていきたいと考えています。大人の遊び場はたくさんあります。広